

[佳 作]

「北方領土問題と自分」

北海道教育大学附属札幌中学校

2年 佐竹 柊哉

「あー、こわい」

これは、北方領土の元島民が国後島の墓地がある丘に辿り着いたときの言葉だ。国後島の上陸地点ラシコマンベツから墓地がある丘までは約2キロメートル。舗装された道路は無い。その丘に行くまで40分はかかる。

なぜ元島民は自分の身を削ってまでも墓地に行こうとするのだろうか。そう北方四島を返してほしいからだ。元島民の平均年齢は今年で82歳になった。それでも四島を返してほしいという熱い気持ちは、5年前、10年前と変わっていないどころか高まっているのだと思う。

そもそも北方領土問題とは何なのか。

1855年、「日露通好条約」が結ばれた。これにより、ウルップ島から北はロシア領、択捉島から南は日本領と決まった。しかし、第二次世界大戦時にロシアは対日参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後、1948年までに日本人は北方領土から強制退去させられた。それから約70年間、ロシアは不法占拠し続けている。

そして今、2月7日を「北方領土の日」と定めている。2月7日は日露通好条約が締結された日だ。択捉島から南は日本領だということを強く訴えているのが伝わる。この日が設けられた目的は、北方領土に対する国民の関心と理解を更に深め、全国的な北方領土返還運動の一層の推進を図ることだ。僕は「北方領土の日」は北方領土問題を全国に広げていく為の良い機会だと思う。北海道だけの問題ではない。日本全国としての問題にすることで、四島返還に一步でも近づくことができるのではないだろうか。

北方領土問題のゴールはどこなのか。四島返還か。僕は、それは通過点であり、ロシアっていい国だなという印象を持つことだと思う。私たちは「ロシアといえば北方領土問題」という印象を持ってしまいがちである。しかし、北方領土返還をしたとしたら、ロシアとの外交や交流が今よりもスムーズに進むと思う。それにより、ロシアのイメージを変えることができる。

ところで、四島返還は「話し合い」が大切だと思う。元島民の方々は一刻も早く日本に返還してほしい、そんな願いが強いだろう。しかし、北方領土のロシア不法占拠は約70年前に始まったことで、二世、三世と家庭を築いている人が数多くいる。彼らにとって北方領土が故郷なのだ。「不法」という言葉を聞くと傷つく人もいるかもしれない。僕は日本とロシアの双方が納得できる状態で返還できてこそ「和解」だと思う。

北方領土問題が始まってから70年。年月が経てば経つほど元島民の体・心の負担は増していく。しかし、日本がロシアに「返せ」の一言だけでは、和解は当然できないであろう。僕たち中学生には「北方領土を知る」ことしかできない。しかし知ること、元島民の意見や考えを理解することができる。理解し合うことで協力できる。

「道民」だけでなく「国民」一人一人が協力し合い、北方領土返還へ一步でも前進することを願う。